(6) レスピレーター

全体としてレスピレーターは、初回は「ない」が 16,149 名（100.0%）、「ある」が 7 名（0.0%）であった。2 回目は「ない」が 16,150 名（100.0%）、「ある」が 6 名（0.0%）であった。3 回目は「ない」が 16,148 名（100.0%）、「ある」が 8 名（0.0%）であった。4 回目は「ない」が 16,145 名（99.9%）、「ある」が 11 名（0.1%）であった。

このように、レスピレーターは、ほとんど利用されていなかった。

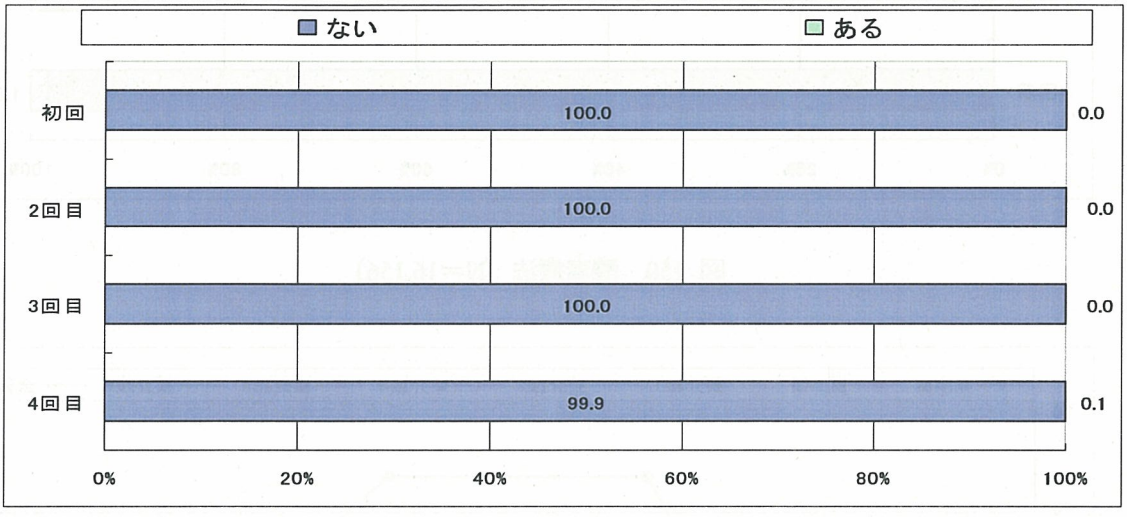

図 152　レスピレーター（N=16,156）

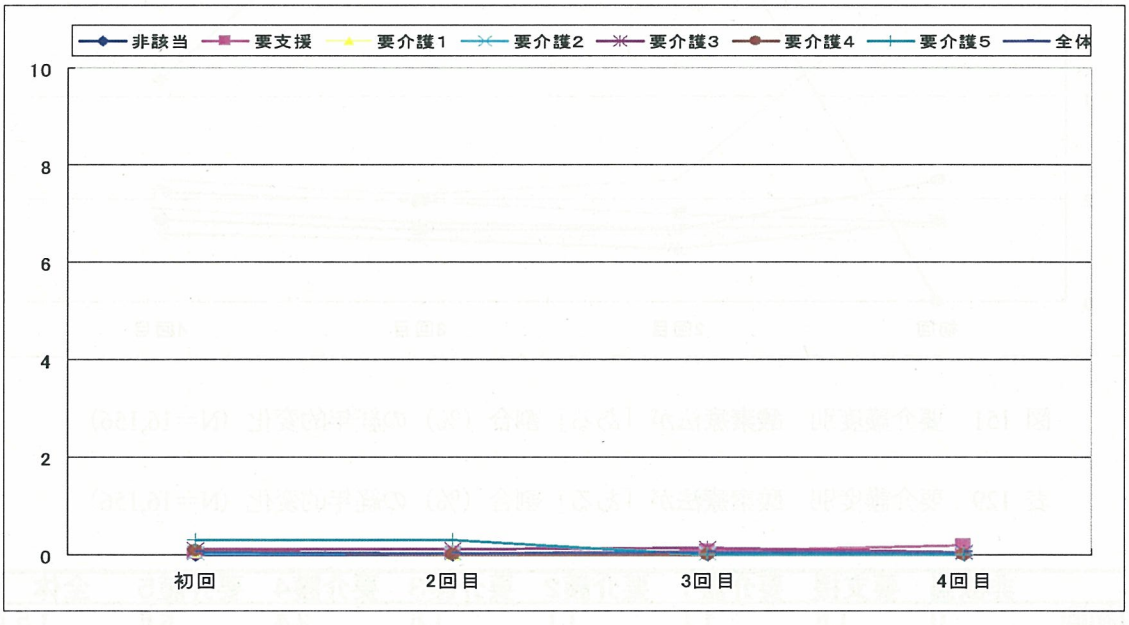

図 153　要介護度別レスピレーター「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 130　要介護度別　レスピレーター「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0	0	0	0.1	0.1	0.3	0
2回目	0	0	0	0	0.1	0	0.3	0
3回目	0	0.1	0	0	0.1	0	0	0
4回目	0	0.2	0.1	0	0	0	0	0.1

(7) 気管切開の処置

全体として気管切開の処置は、初回は「ない」が 16,136 名（99.9%）、「ある」が 20 名（0.1%）であった。２回目は「ない」が 16,145 名（99.9%）、「ある」が 11 名（0.1%）であった。３回目は「ない」が 16,142 名（99.9%）、「ある」が 14 名（0.1%）であった。４回目は「ない」が 16,135 名（99.9%）、「ある」が 21 名（0.1%）であった。

このように、気管切開を行っているものは、初回から４回まで 0.1%と少なかった。要介護度別には、要介護５に発生率が高かったが、初回 1.5%から、２回目 0.9%、３回目 0.6%、４回目 0.3%と減少していた。

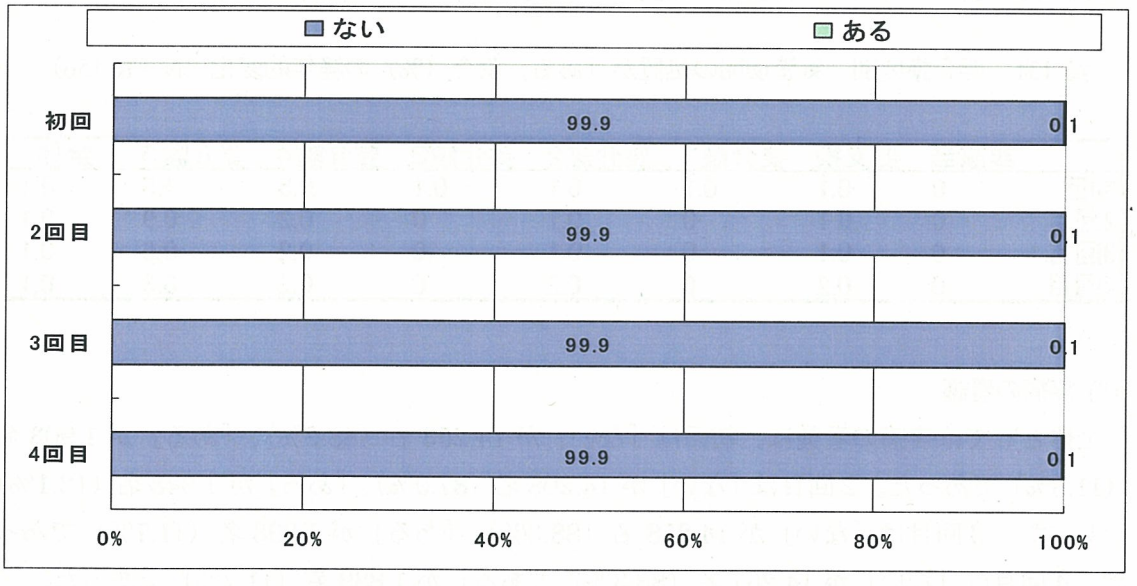

図 154　気管切開の処置（N=16,156）

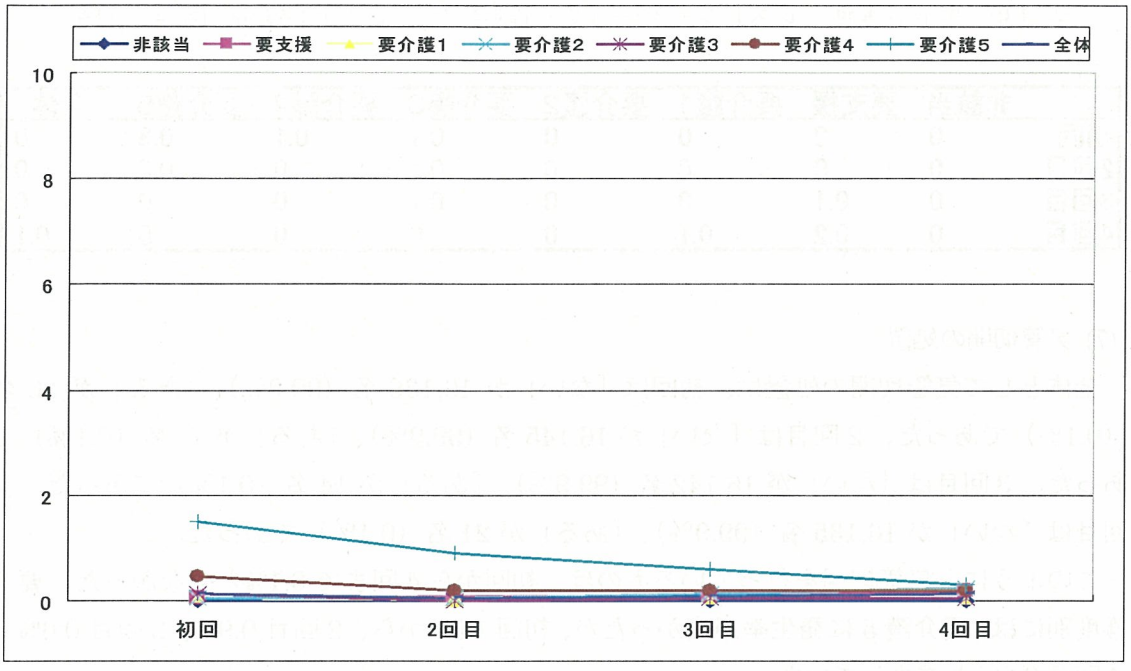

図 155　要介護度別　気管切開の処置が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 131　要介護度別　気管切開の処置が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.5	1.5	0.1
2回目	0	0.1	0	0.1	0	0.2	0.9	0.1
3回目	0	0.1	0	0.1	0	0.2	0.6	0.1
4回目	0	0.2	0	0.2	0	0.2	0.3	0.1

(8) 疼痛の看護

全体としては疼痛の看護は、初回は「ない」が 14,253 名（88.2%）、「ある」が 1,903 名（11.8%）であった。2 回目は「ない」が 14,208 名（87.9%）、「ある」が 1,948 名（12.1%）であった。3 回目は「ない」が 14,258 名（88.3%）、「ある」が 1,898 名（11.7%）であった。4 回目は「ない」が 14,267 名（88.3%）、「ある」が 1,889 名（11.7%）であった。

このように、疼痛の看護の発生率は、初回が 11.8%、2 回目 12.1%と増加し、3 回目、4 回目は、11.7%と減少していた。

要介護度別には、初回は要介護 5 が 13.1%と高い割合を示していた。しかし、2 回目には、要支援が 14.5%、要介護 1 が 13.3%と高く、3 回目においては、要支援が 15.2%、4 回目も 15.0%と高い割合を示していた。

初回から 2 回目にかけては、非該当から要介護 2 までは、疼痛の看護は増加していたが、要介護 3 から要介護 5 までは、減少していた。2 回目から 3 回目は、要支援は増加していたが、他の要介護度はすべて減少していた。3 回目から 4 回目は、要介護 2 と要介護 5 が

増加し、それ以外は減少していた。

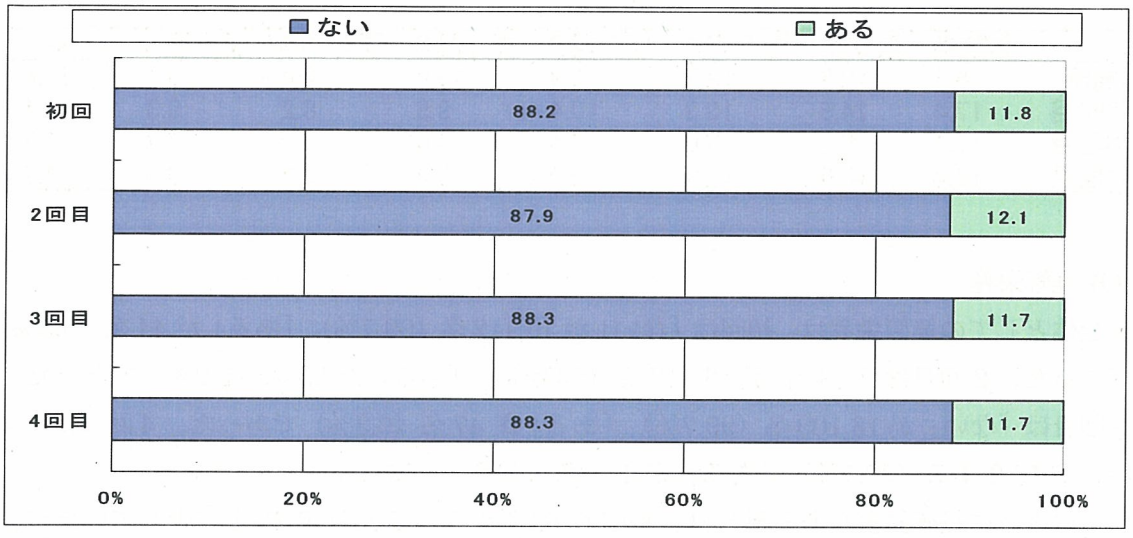

図 156　疼痛の看護（N＝16,156）

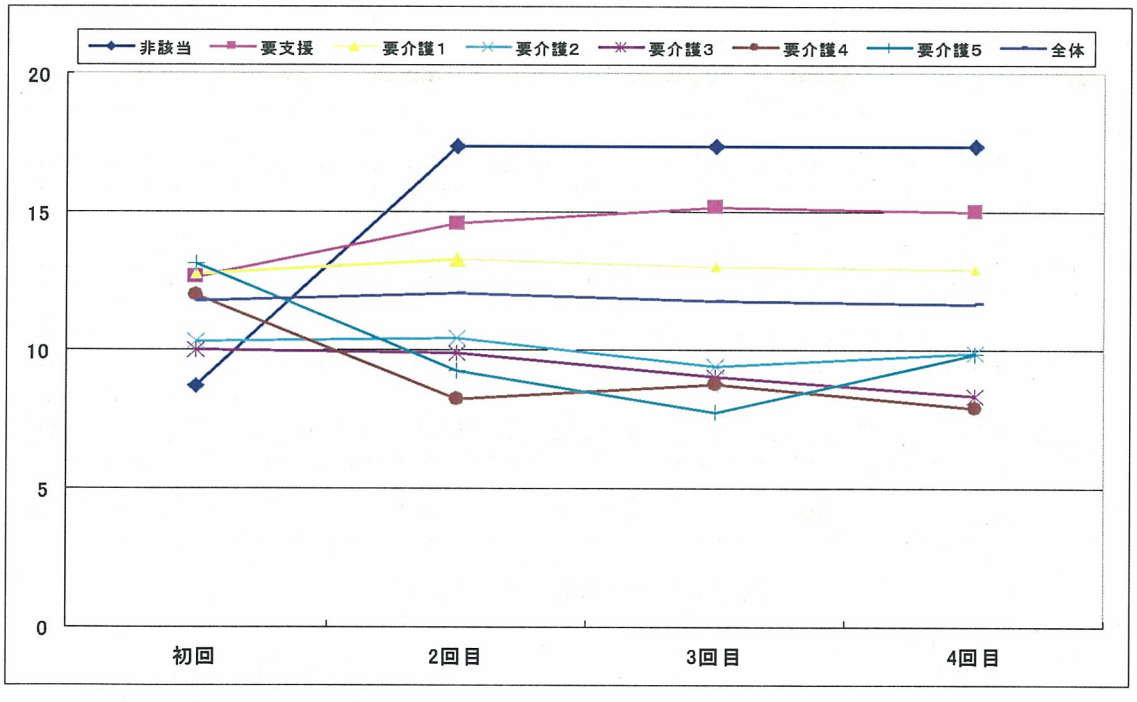

図 157　要介護度別　疼痛の看護が「ある」割合（%）の経年的変化（N＝16,156）

表 132　要介護度別　疼痛の看護が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	8.7	12.6	12.7	10.3	10.0	12.0	13.1	11.8
2回目	17.4	14.5	13.3	10.4	9.9	8.2	9.3	12.1
3回目	17.4	15.2	13.0	9.4	9.0	8.8	7.8	11.7
4回目	17.4	15.0	12.9	9.9	8.3	7.9	9.9	11.7

(9) 経管栄養

全体としての経管栄養は、初回は「ない」が 16,112 名（99.7%）、「ある」が 44 名（0.3%）であった。２回目は「ない」が 16,117 名（99.8%）、「ある」が 39 名（0.2%）であった。３回目は「ない」が 16,109 名（99.7%）、「ある」が 47 名（0.3%）であった。４回目は「ない」が 16,014 名（99.1%）、「ある」が 142 名（0.9%）であった。

このように経管栄養がある割合は、初回の 0.3%から、２回目 0.2%と減少していたが、４回目は 0.9%と増加していた。

要介護度別には、要介護５での発生率が高く、初回が 8.1%と最も高くなっていた。要支援から要介護３までは、認定回数の増加に伴って、経管栄養の発生率も高くなっていたが、要介護４と５は３回目までは減少し、４回目で増加していた。

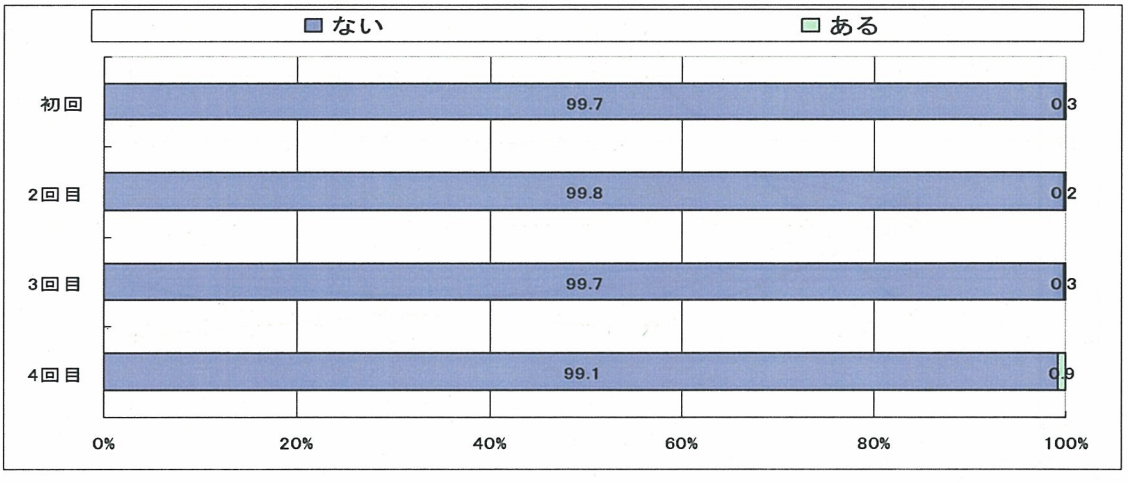

図 158　経管栄養（N=16,156）

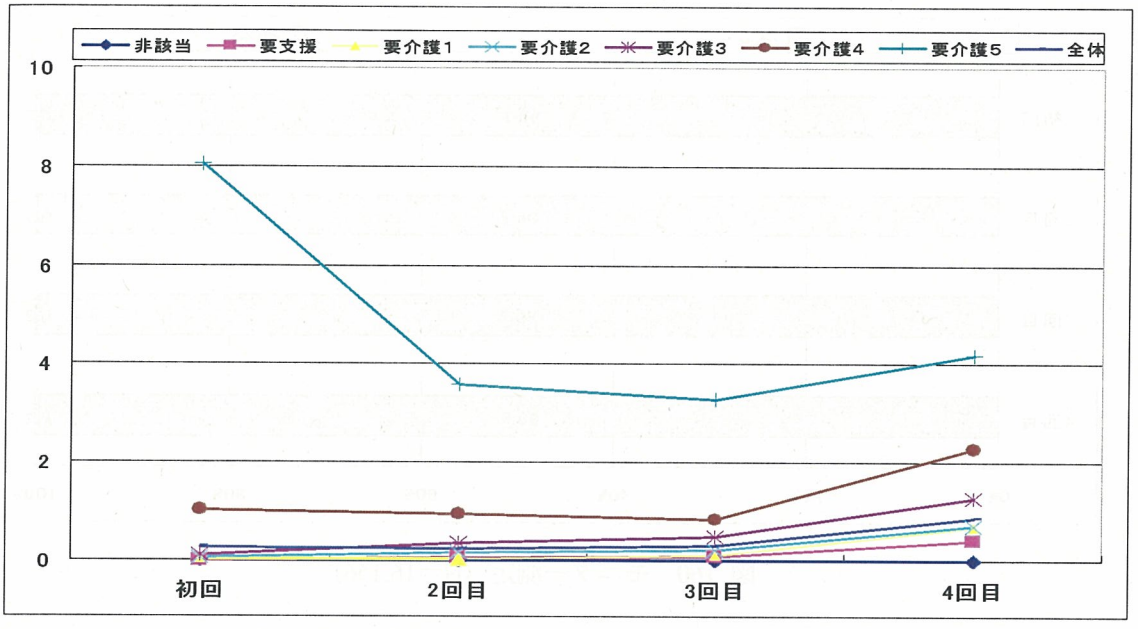

図 159　要介護度別経管栄養が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 133　要介護度別経管栄養が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0	0	0.1	0.1	1.0	8.1	0.3
2回目	0	0.1	0	0.2	0.3	0.9	3.6	0.2
3回目	0	0.1	0.1	0.2	0.5	0.8	3.3	0.3
4回目	0	0.4	0.7	0.7	1.3	2.3	4.2	0.9

(10) モニター測定

全体として、モニター測定は、初回は「ない」が 16,102 名（99.7%）、「ある」が 54 名（0.3%）であった。２回目は「ない」が 16,041 名（99.7%）、「ある」が 47 名（0.3%）であった。３回目は「ない」が 16,110 名（99.7%）、「ある」が 46 名（0.3%）であった。４回目は「ない」が 16,097 名（99.6%）、「ある」が 59 名（0.4%）であった。このようにモニター測定は、0.3%程度と、低い発生率であった。

要介護度別には、要介護 5 の初回の 2.7%が最も高い割合であった。要介護 5 は、２回目は 0%と減少し、３回目 0.3%、４回目 0.9%と増加していたが、発生率はかなり低かった。いずれの要介護度においても発生率はかなり低く、経年的に増加する傾向はみられなかった。

図 160　モニター測定（N=16,156）

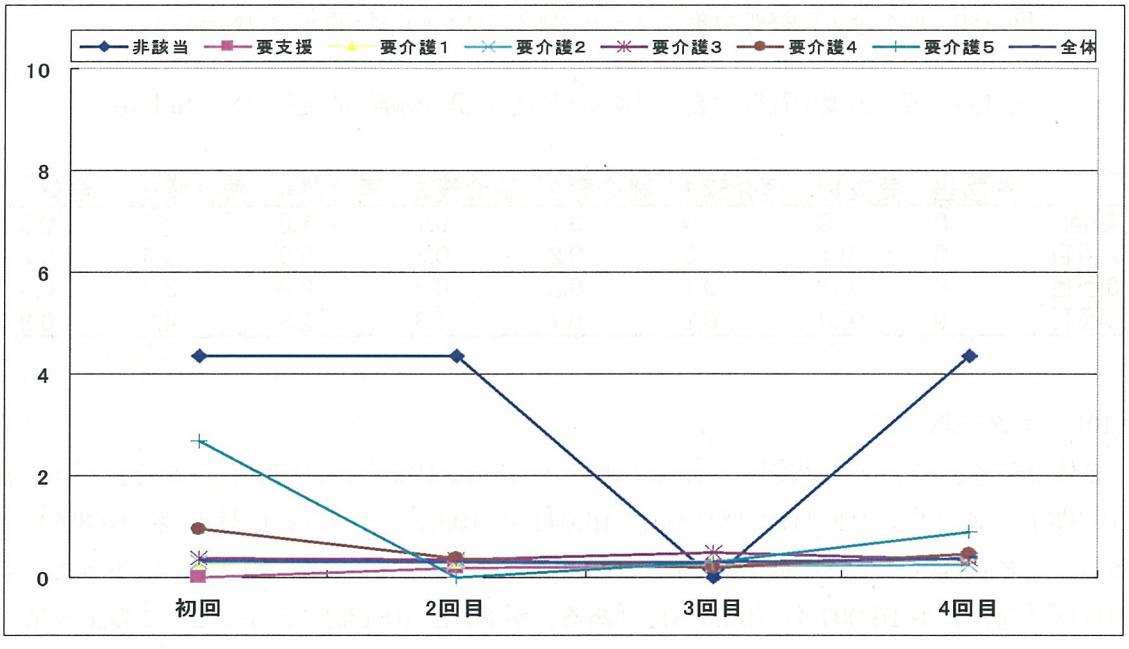

図 161　要介護度別　モニター測定が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 134　要介護度別　モニター測定が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	4.3	0	0.3	0.3	0.4	0.9	2.7	0.3
2回目	4.3	0.2	0.3	0.3	0.3	0.4	0	0.3
3回目	0	0.2	0.3	0.2	0.5	0.2	0.3	0.3
4回目	4.3	0.4	0.4	0.2	0.3	0.5	0.9	0.4

(11) じょくそうの処置

全体として、じょくそうの処置については、初回は「ない」が 15,987 名（99.0%）、「ある」が 169 名（1.0%）であった。2 回目は「ない」が 16,041 名（99.3%）、「ある」が 115 名（0.7%）であった。3 回目は「ない」が 16,012 名（99.1%）、「ある」が 144 名（0.9%）であった。4 回目は「ない」が 15,915 名（98.5%）、「ある」が 241 名（1.5%）であった。このように、じょくそうは、初回 1.0%、2 回目 0.7%と減少し、3 回目 0.9%、4 回目 1.5%と増加していたが、発生率としては低かった。

要介護度別には、じょくそうの処置の発生率が高いのは要介護 5 で初回は、15.8%であった。要介護 5 は、初回から 4 回目まで、認定回数が増えるにしたがって、じょくそうの処理は減少していた。非該当では、じょくそうの処置は、全く発生していなかった。要支援から要介護 2 までは、認定回数が増加するにしたがって、じょくそうの処置も増加していた。要介護 3 は、初回から 3 回目まで、減少し、4 回目で増加していた。要介護 4 は、初回から 2 回目で減少するが、3 回目、4 回目と増加に転じていた。

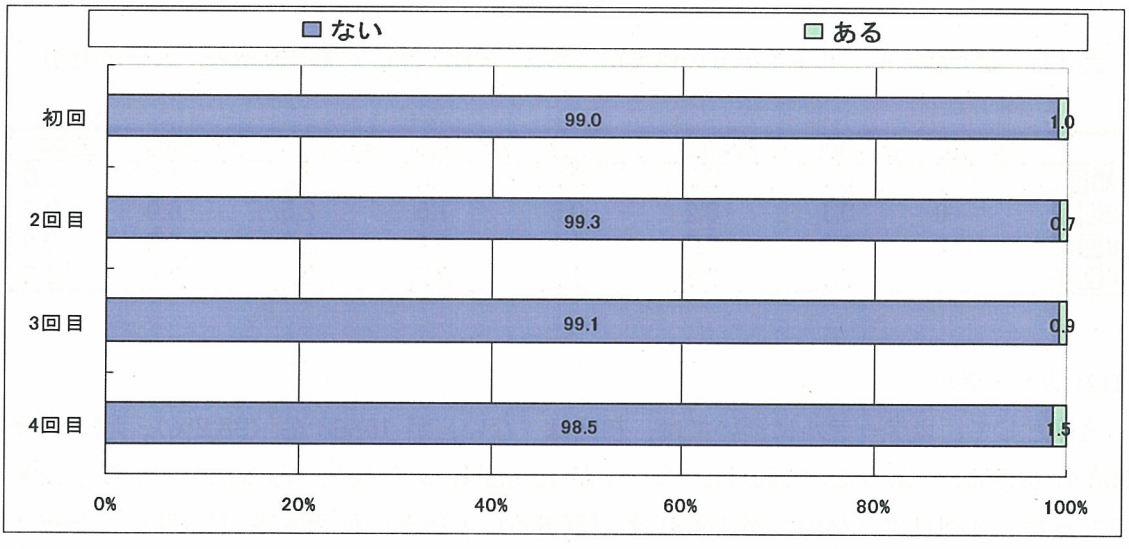

図 162　じょくそうの処置（N=16,156）

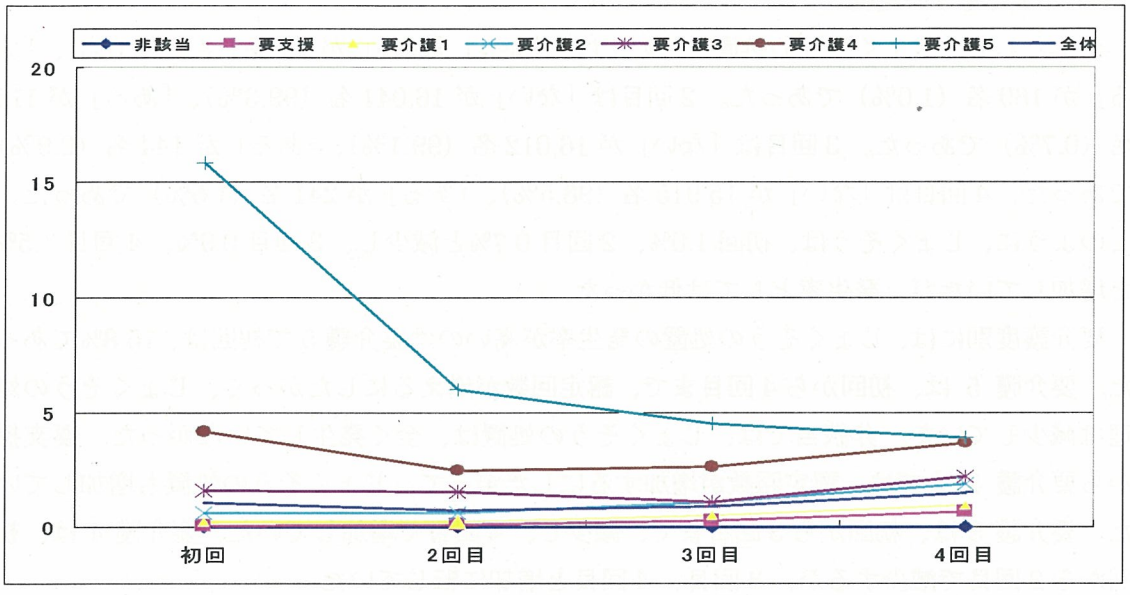

図 163　要介護度別　じょくそうの処置が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 135　要介護度別　じょくそうの処置が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.1	0.2	0.6	1.6	4.2	15.8	1.0
2回目	0	0.1	0.2	0.6	1.5	2.5	6.0	0.7
3回目	0	0.3	0.5	1.1	1.1	2.6	4.5	0.9
4回目	0	0.7	0.9	1.9	2.2	3.7	3.9	1.5

(12) カテーテル

全体として、カテーテルについては、初回は「ない」が 15863 名（98.2%）、「ある」が 293 名（1.8%）であった。2回目は「ない」が 15963 名（98.8%）、「ある」が 193 名（1.2%）であった。3回目は「ない」が 15931 名（98.6%）、「ある」が 225 名（1.4%）であった。4回目は「ない」が 15849 名（98.1%）、「ある」が 307 名（1.9%）であった。このように、カテーテルがある割合は、初回は、1.8%、2回目 1.2%と減少し、3回目が 1.4%と増加、さらに4回目 1.9%と増加していた。

要介護度別には、初回の要介護5は 25.1%と高い割合であったが、2回目は 6.6%と急激に低下し、3回目も 4.2%とさらに低くなっていた。4回目は、5.4%と増加しており、要介護 5 での発生率が高いことが示されていた。このほかに要介護 4 でも、カテーテルの発生率は高いが、その割合は、初回から4回と認定回数が増加するにしたがって、順に減少していた。要支援から要介護 2 までは、認定回数が増加するにしたがって、カテーテルの発生率は増加していた。

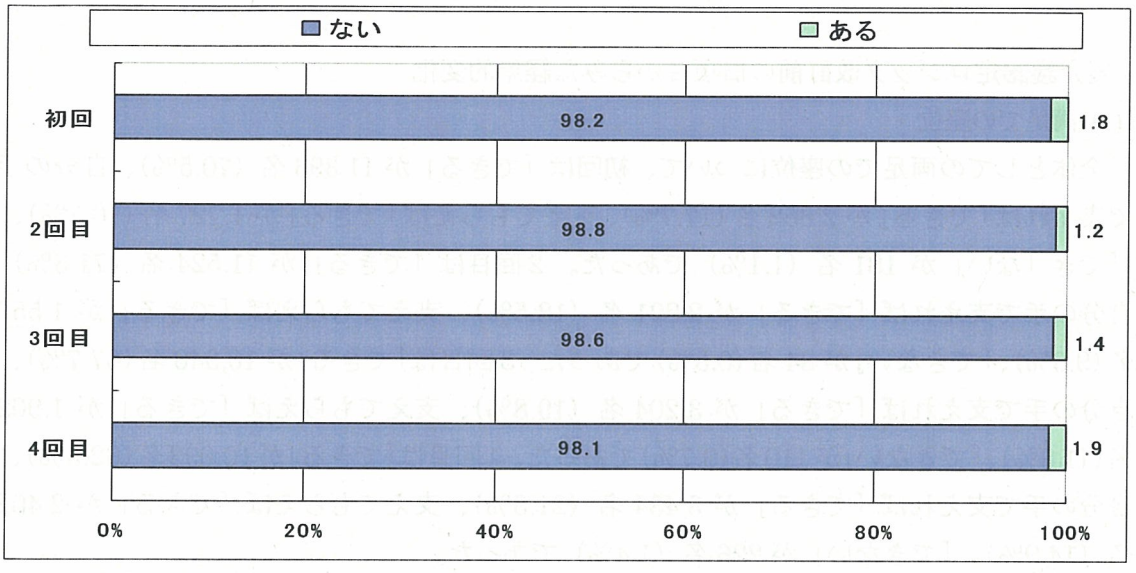

図 164　カテーテル（N=16,156）

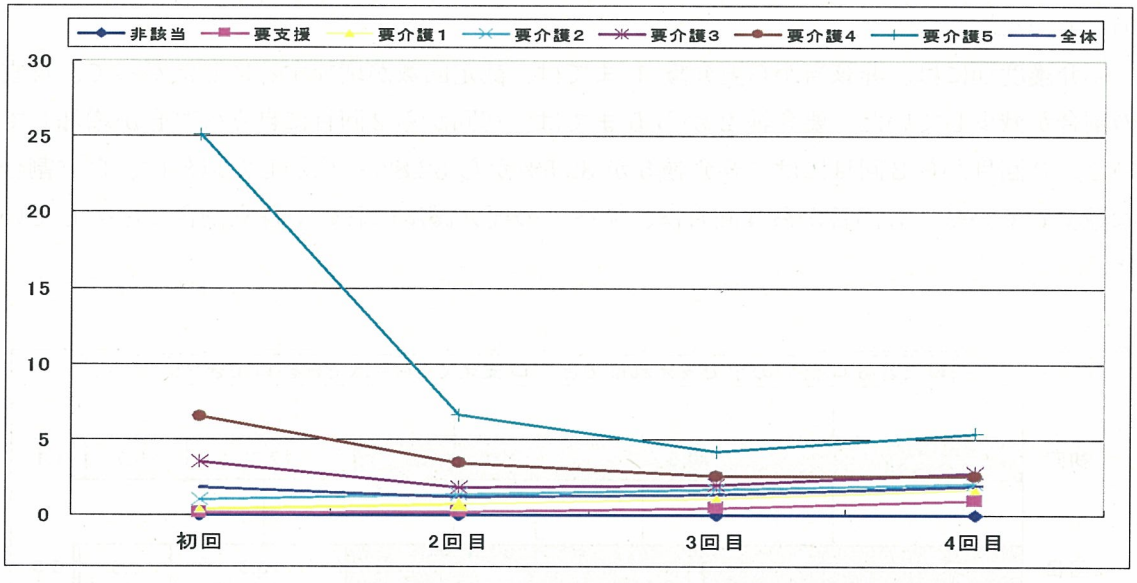

図 165　要介護度別　カテーテル処置が「ある」割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 136　要介護度別　カテーテル処置が「ある」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.1	0.4	1.0	3.6	6.5	25.1	1.8
2回目	0	0.2	0.7	1.3	1.8	3.5	6.6	1.2
3回目	0	0.5	1.1	1.7	2.0	2.5	4.2	1.4
4回目	0	0.9	1.7	2.1	2.8	2.5	5.4	1.9

3.要介護認定ロジック改訂前の旧項目からみた経年的変化

(1) 両足での座位

全体としての両足での座位について、初回は「できる」が 11,396 名（70.5%）、自分の手で支えれば「できる」が 2,852 名（17.7%）、支えてもらえば「できる」が 1,727 名（10.7%）、「でき「ない」が 181 名（1.1%）であった。２回目は「できる」が 11,524 名（71.3%）、自分の手で支えれば「できる」が 2,991 名（18.5%）、支えてもらえば「できる」が 1,557 名（9.6%）、「できない」が 84 名（0.5%）であった。３回目は「できる」が 10,940 名（67.7%）、自分の手で支えれば「できる」が 3,204 名（19.8%）、支えてもらえば「できる」が 1,902 名（11.8%）、「できない」が 110 名（0.7%）であった。４回目は「できる」が 10,093 名（62.5%）、自分の手で支えれば「できる」が 3,434 名（21.3%）、支えてもらえば「できる」が 2,402 名（14.9%）、「できない」が 226 名（1.4%）であった。

これらの結果、両足での座位について、何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回は 29.5%、２回目は 28.7%と減少していたが、３回目は 32.7%、４回目は 37.5%と増加していた。

要介護度別には、非該当から要介護 1 までは、認定回数が増加するにしたがって、自立の割合が減少していた。要介護 2 から 5 までは、初回から２回目に自立の割合が増加していた。２回目から３回目には、要介護 5 が 32.5%から 32.8%へ増加した以外は、自立割合は減少していた。３回目から４回目は、すべての要介護度において自立割合は減少していた。

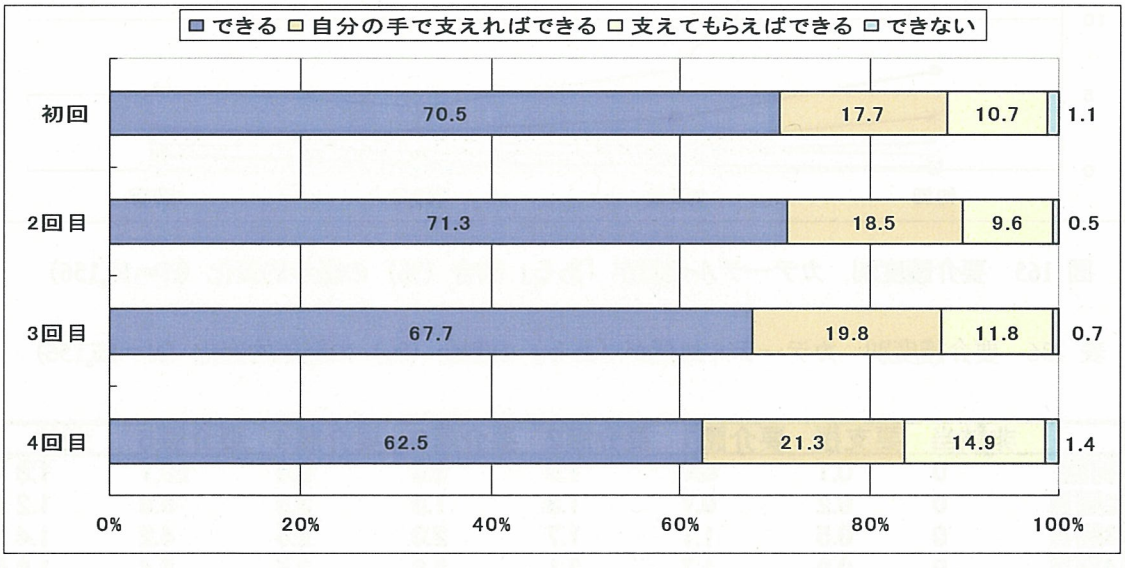

図 166　両足で座位（N=16,156）

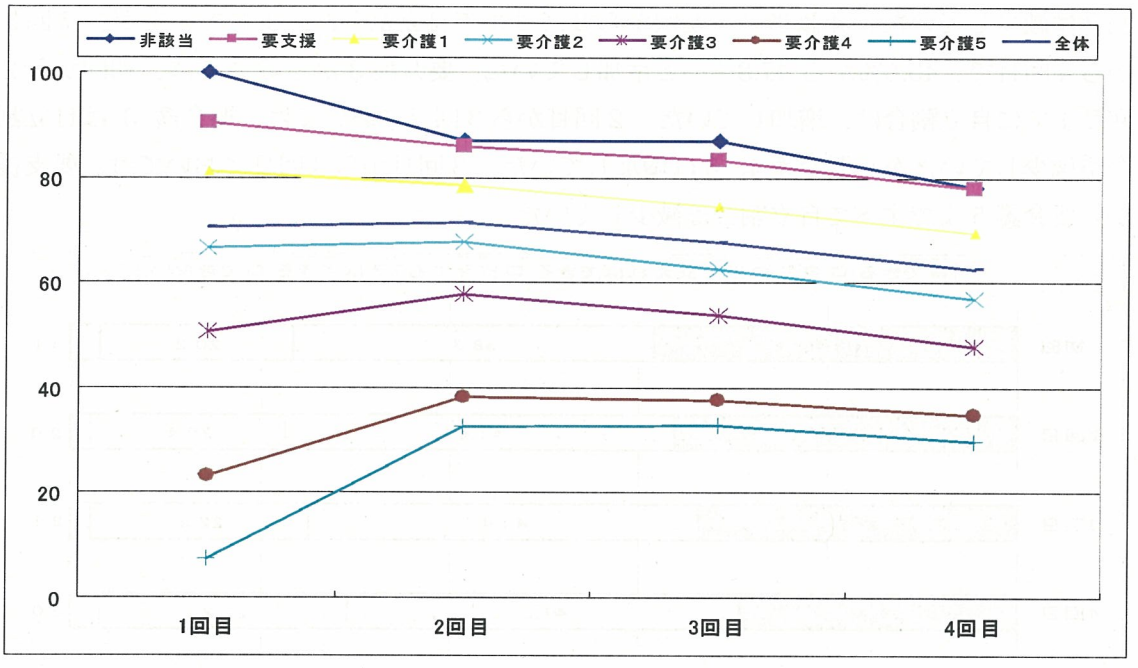

図 167　要介護度別両足で座位「できる」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 137　要介護度別両足つかない座位「できる」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	90.3	81.1	66.6	50.8	23.1	7.5	70.5
2回目	87.0	85.9	78.5	67.6	57.9	38.3	32.5	71.3
3回目	87.0	83.4	74.4	62.7	53.7	37.6	32.8	67.7
4回目	78.3	78.0	69.3	57.0	47.8	34.7	29.9	62.5

(2) 両足つかない座位

全体として、両足のつかない座位については、初回は「できる」が 6,199 名（38.4%）、「自分の手で支えればできる」が 6,183 名（38.3%）、支えてもらえば「できる」が 3,268 名(20.2%)、「できない」が 506 名(3.1%)であった。2 回目は「できる」が 5,840 名(36.1%)、「自分の手で支えればできる」が 6,693 名（41.4%）、「支えてもらえばできる」が 3,298 名(20.4%)、「できない」が 325 名(2.0%)であった。3 回目は「できる」が 5,425 名(33.6%)、「自分の手で支えればできる」が 6,692 名（41.4%）、「支えてもらえばできる」が 3,694 名(22.9%)、「できない」が 345 名(2.1%)であった。4 回目は「できる」が 4,753 名(29.4%)、「自分の手で支えればできる」が 6,680 名（41.3%）、「支えてもらえばできる」が 4,236 名（26.2%）、「できない」が 486 名（3.0%）であった。

これらの結果、両足つかない座位に際して、何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回が 61.6%、2 回目が 63.9%、3 回目が 66.4%、4 回目が 71.6%と増加していた。

要介護度別には、要支援から要介護 2 までは、認定回数が増加するにしたがって、自立

割合は減少していた。非該当は、初回から３回目まで自立割合は減少していたが、３回目から４回目で、43.5%から 47.8%へと増加していた。要介護 3 から 5 までは、初回から２回目までに自立割合は、増加していた。２回目から３回目においては、要介護 3 は自立割合が減少していたが、要介護 4、5 は増加していた。３回目から４回目においては、要支援から要介護 5 まですべて自立割合は減少していた。

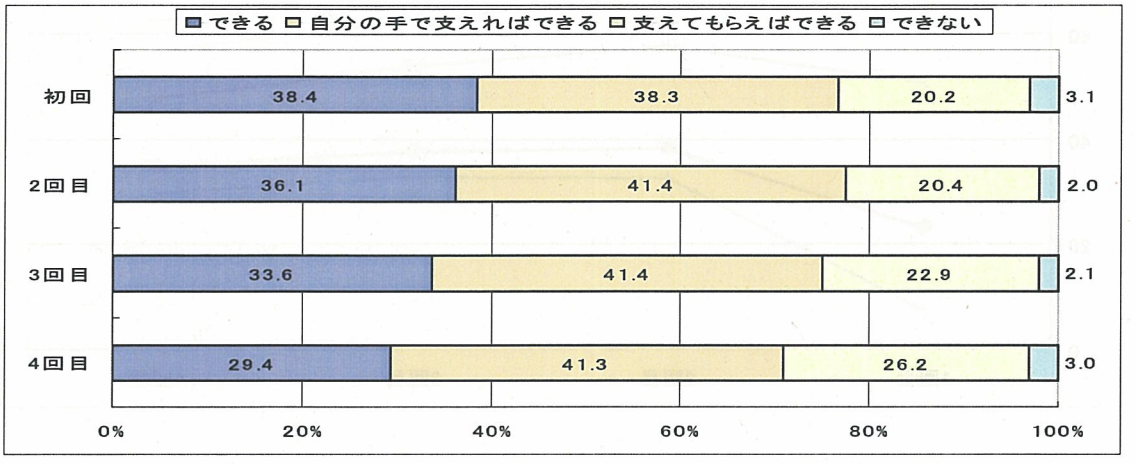

図 168　両足つかない座位（N=16,156）

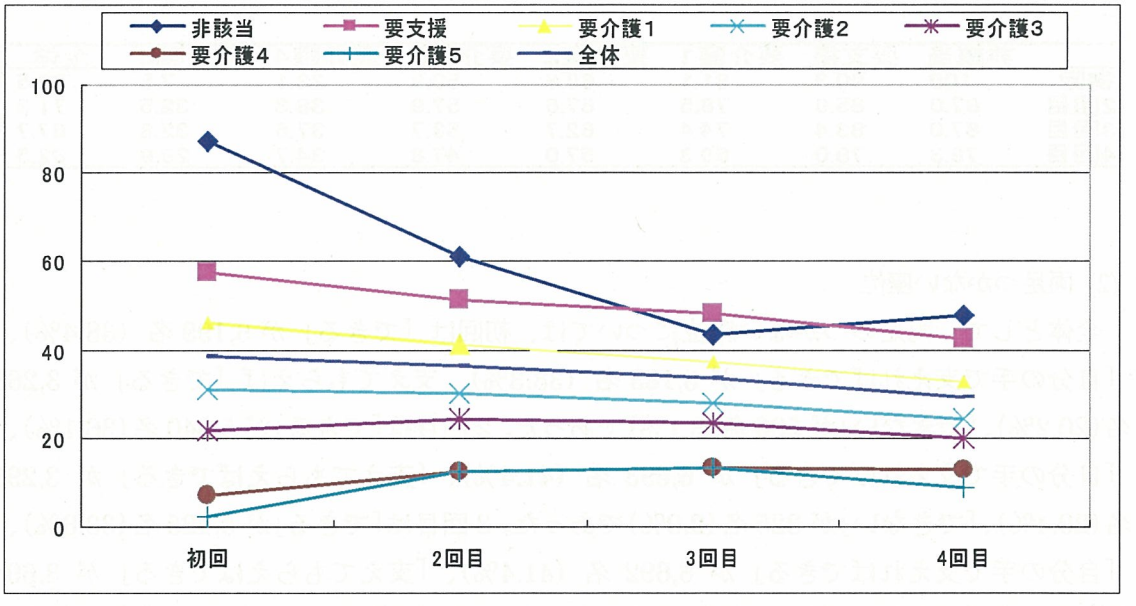

図 169　要介護度別両足つかない座位「できる」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 138　要介護度別両足つかない座位「できる」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	87	57.4	45.8	31.1	21.5	7.2	2.1	38.4
2回目	61	51.3	41.2	30.2	24.3	12.3	12.2	36.1
3回目	43.5	48.3	37.2	27.9	23.6	13.3	13.4	33.6
4回目	47.8	42.3	32.9	24.3	20.0	12.9	8.7	29.4

(3) 浴槽の出入り

全体として、浴槽の出入りは、初回は「自立」が 6,588 名（40.8%）、「一部介助」が 5,703 名（35.3%）、「全介助」が 1,150 名（7.1%）、「行っていない」が 2,715 名（16.8%）であった。２回目は「自立」が 6,122 名（37.9%）、「一部介助」が 6,841 名（42.3%）、「全介助」が 1317 名（8.2%）、「行っていない」が 1,876 名（11.6%）であった。３回目は「自立」が 5,399 名（33.4%）、「一部介助」が 7,245 名（44.8%）、「全介助」が 1,550 名（9.6%）、「行っていない」が 1,962 名（12.1%）であった。４回目は「自立」が 4,569 名（28.3%）、「一部介助」が 7,366 名（45.6%）、「全介助」が 1,843 名（11.4%）、「行っていない」が 2,377 名（14.7%）であった。

このように、浴槽の出入りに何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回が 40.4%、２回目が 50.5%、３回目が 59.8%と増加していたが４回目は 57%と減少していた。また浴槽の出入りを行っていない高齢者の割合は、初回が 16.8%、２回目が 11.6%と減少するが、３回目は、12.1%と増加し、４回目も 14.7%とさらに増加していた。浴槽の出入りが自立している高齢者の割合は、他の調査項目に比較して低い割合を示していた。

要介護度別に、浴槽の出入りが自立している割合について初回から４回目までの推移を見た結果、非該当、要支援、要介護 1 を除くと自立割合は、かなり低かった。初回からの推移に関しては要支援と要介護 1 は、認定回数が増えるにしたがって、自立割合が低下していた。要介護 2 から 5 は、初回から２回目までは、自立割合は増加していた。２回目から３回目は、非該当が 39.1%から 56.5%へ、要介護 4 が 3.3%から 3.4%に増加した以外は、すべて減少していた。３回目から４回目は、要介護 5 が 1.5%から 2.7%に増加した以外はすべて減少していた。

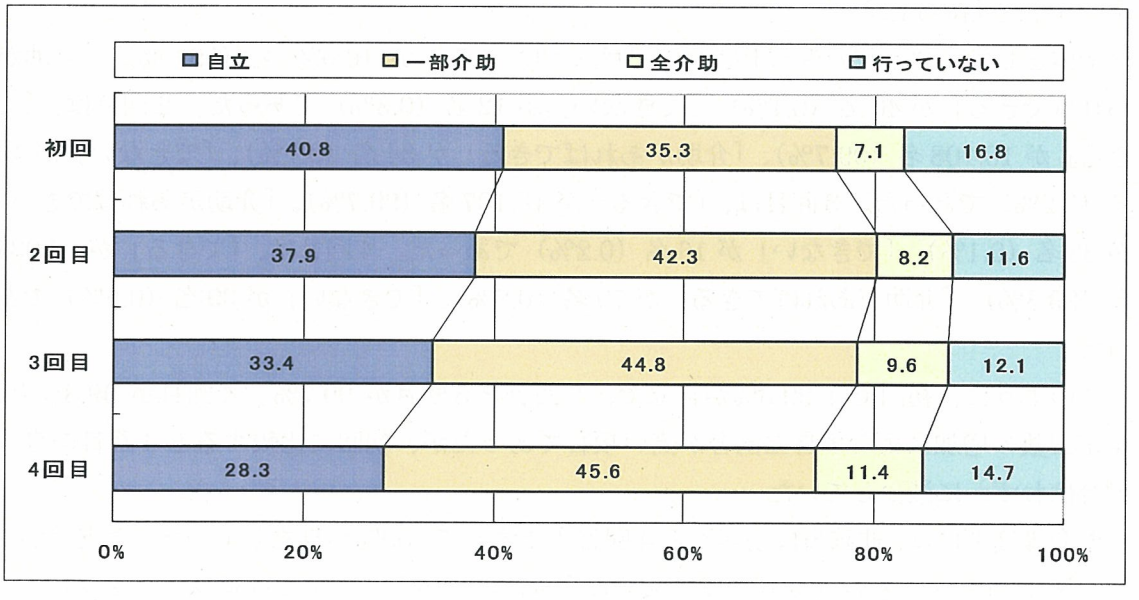

図 170　浴槽の出入り（N=16,156）

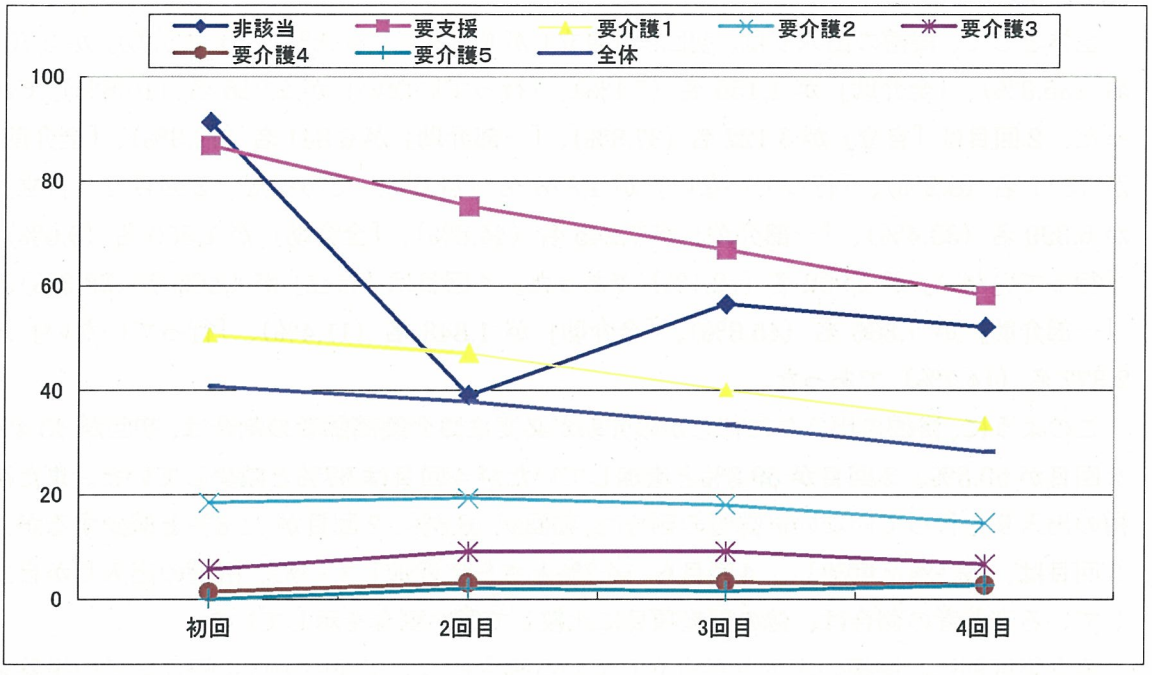

図 171　要介護度別浴槽の出入り「自立」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 139　要介護度別浴槽の出入り「自立」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	91.3	86.8	50.6	18.5	5.7	1.4	0.0	40.8
2回目	39.1	75.2	47.1	19.3	9.2	3.2	2.1	37.9
3回目	56.5	66.9	40.1	18.1	9.2	3.3	1.5	33.4
4回目	52.2	58.2	33.7	14.6	6.7	2.7	2.7	28.3

(4) 片手胸元持ち上げ

全体として、片手胸元持ち上げが、初回は、「できる」が 16,098 名（99.6%）、「介助があればできる」が 46 名（0.1%）、「できない」が 12 名（0.3%）であった。２回目は、「できる」が 16,108 名（99.7%）、「介助があればできる」が 34 名（0.1%）、「できない」が 14 名（0.2%）であった。３回目は、「できる」が 16,107 名（99.7%）、「介助があればできる」が 33 名（0.1%）、「できない」が 16 名（0.2%）であった。４回目は、「できる」が 16,037 名（99.3%）、「介助があればできる」が 79 名（0.2%）、「できない」が 39 名（0.5%）であった。

このように、初回では 99.6%が自立で、２回目と３回目が 99.7%、４回目が 99.3%と、認定回数の増加によらず自立割合が高い項目であったが、初回に比較すると４回目の自立割合はわずかに減少していた。

要介護度別には、非該当は初回から４回目まですべて 100%が自立していた。要支援から要介護 3 までも、初回から４回まで大きな変動はないが、わずかに自立割合が減少していた。要介護 4 と 5 は、初回から２回目に自立割合が増加していた。要介護 4 は３回目、4

回目と減少していたが、要介護５だけは３回目にも自立割合が増加していた。

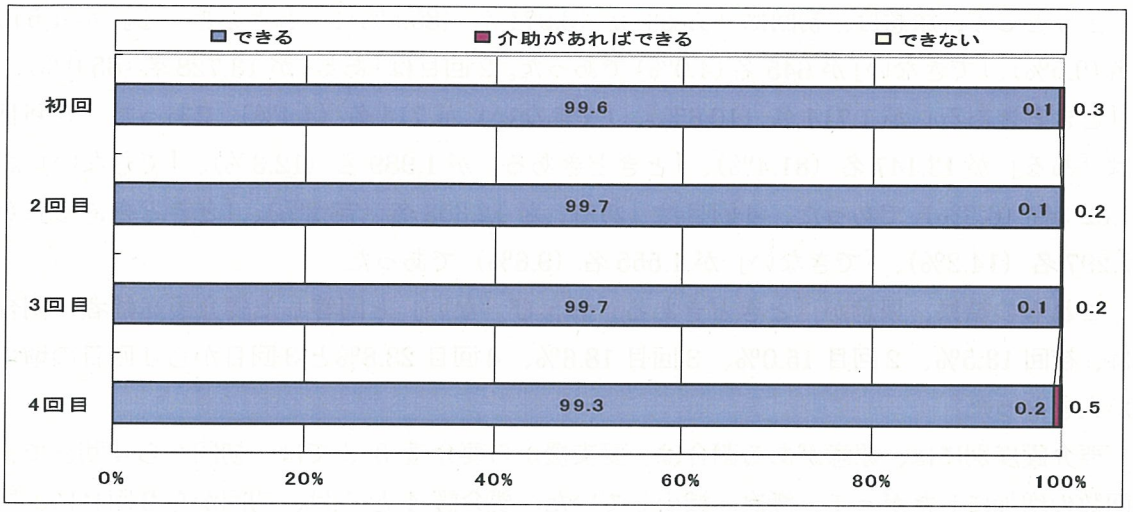

図 172　片手胸元持ち上げ（N=16,156）

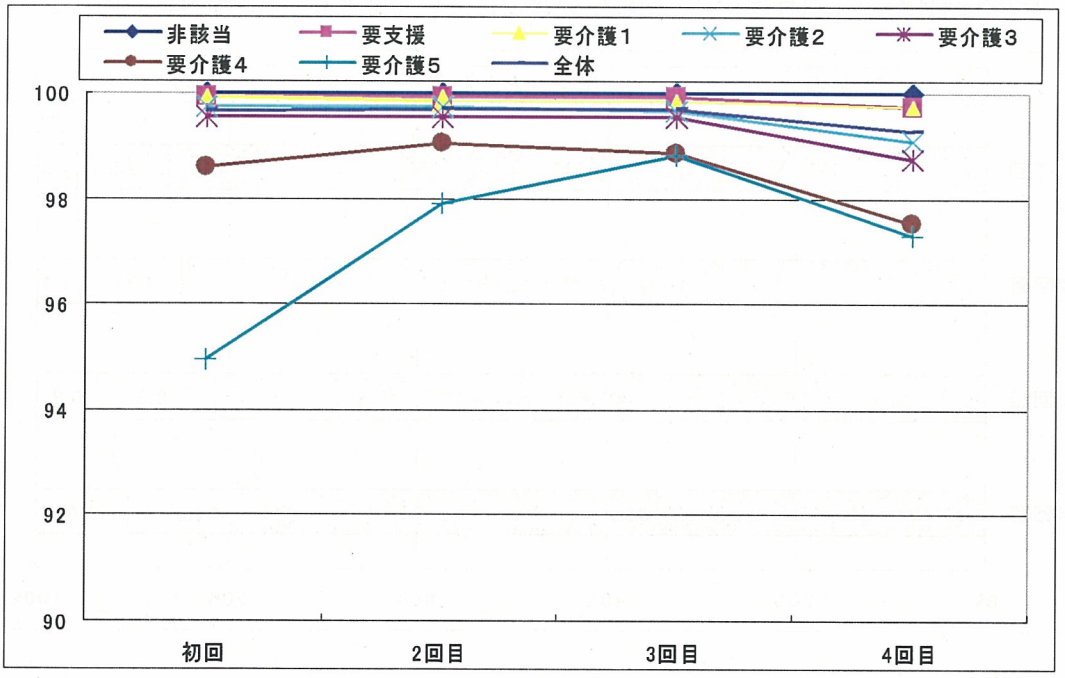

図 173　要介護度別片手胸元持ち上げ「できる」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 140　要介護度別片手胸元持ち上げ「できる」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	99.9	99.9	99.7	99.6	98.6	94.9	99.6
2回目	100	99.9	99.8	99.7	99.6	99.1	97.9	99.7
3回目	100	99.9	99.8	99.7	99.6	98.9	98.8	99.7
4回目	100	99.7	99.7	99.1	98.7	97.5	97.3	99.3

(5) 尿意

全体として、尿意は、初回は「ある」が 13,971 名（86.5%）、「ときどきある」が 1,540 名 (9.5%)、「できない」が 645 名 (4.0%) であった。2 回目は「ある」が 13,728 名 (85.0%)、「ときどきある」が 1,714 名（10.6%）、「できない」が 714 名（4.4%）であった。3 回目は「ある」が 13,147 名（81.4%）、「ときどきある」が 1,989 名（12.3%）、「できない」が 1,020 名（6.3%）であった。4 回目は「ある」が 12,303 名（76.2%）、「ときどきある」が 2,297 名（14.2%）、「できない」が 1,555 名（9.6%）であった。

これらの結果、尿意が「ときどきある」および「ない」と回答した要介護高齢者の割合は、初回 13.5%、2 回目 15.0%、3 回目 18.6%、4 回目 23.8%と 3 回目から 4 回目の増加が大きかった。

要介護度別には、尿意がある割合は、要支援から要介護 3 までは、初回から 4 回まで、回数の増加にしたがって、漸次、減少していた。要介護 4 と 5 は、初回から 2 回目に、尿意がある者の割合がそれぞれ、初回 52.7%から 61.4%へ、48.4%から 61.8%へと増加していた。3 回目から 4 回目は、被害等が 87.0%から 91.3%に増加した以外は、すべて減少していた。3 回目から 4 回目は、すべての要介護度において尿意がある割合は減少していた。

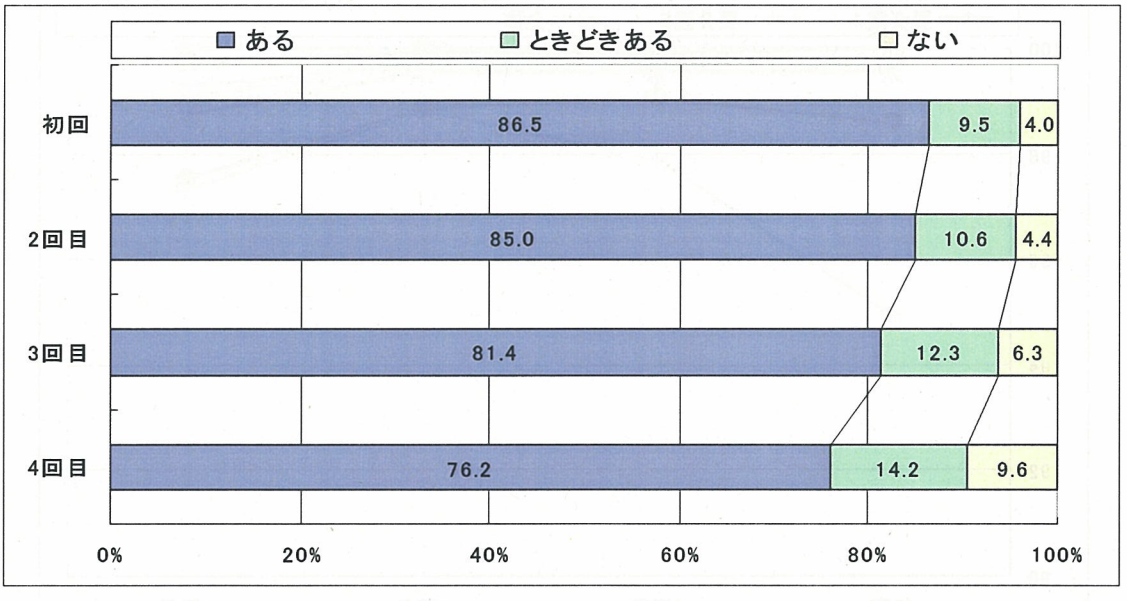

図 174　尿意（N=16,156）

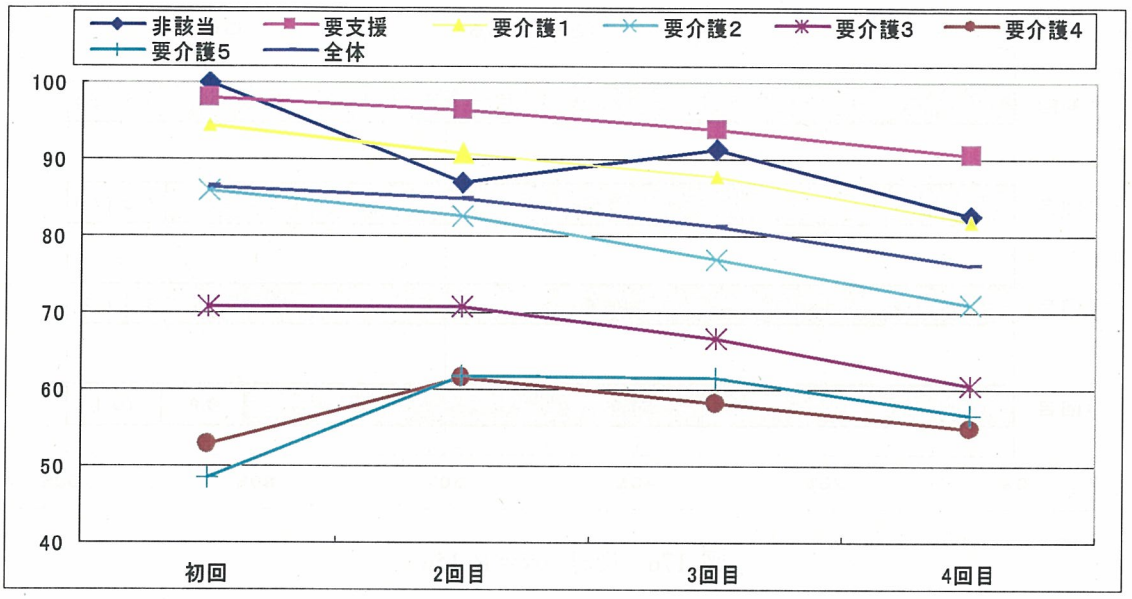

図 175　要介護度別尿意「ある」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 141　要介護度別尿意「ある」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	97.8	94.3	86.0	70.7	52.7	48.4	86.5
2回目	87.0	96.4	90.8	82.4	70.7	61.4	61.8	85.0
3回目	91.3	93.9	87.7	76.8	66.7	58.3	61.5	81.4
4回目	82.6	90.5	81.9	70.9	60.5	55.0	56.7	76.2

(6) 便意

全体として、便意は、初回は「ある」が 14,576 名（90.2%）、「ときどきある」が 905 名（5.6%）、「できない」が 675 名（4.2%）であった。2 回目は「ある」が 14,480 名（89.6%）、「ときどきある」が 963 名（6.0%）、「できない」が 713 名（4.4%）であった。3 回目は「ある」が 13967 名（86.5%）、「ときどきある」が 1,182 名（7.3%）、「できない」が 1,007 名（6.2%）であった。4 回目は「ある」が 13,141 名（81.3%）、「ときどきある」が 1,386 名（8.6%）、「できない」が 1,628 名（10.1%）であった。

これらの結果、便意が「ときどきある」あるいは、「ない」要介護高齢者の割合は、初回 9.8%、2 回目 10.4%、3 回目 13.5%、4 回目 18.7%と、漸次、増加する傾向が見られた。

要介護度別には、非該当から要介護 2 までは、初回から 4 回目まで漸次、便意がある者の割合は減少していた。要介護 3 から 5 までは、初回から 2 回に便意ありの割合が増加していた。2 回目から 3 回目に、この割合が増加していたのは、要介護 5 だけだった。3 回目から 4 回目は、すべての要介護度において、便意がある割合は減少していた。

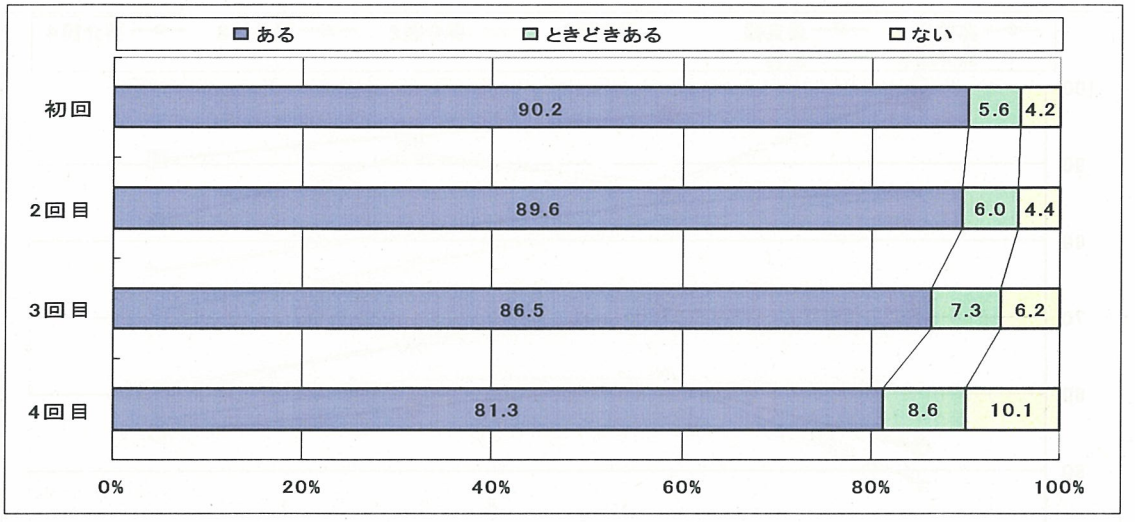

図 176　便意（N=16,156）

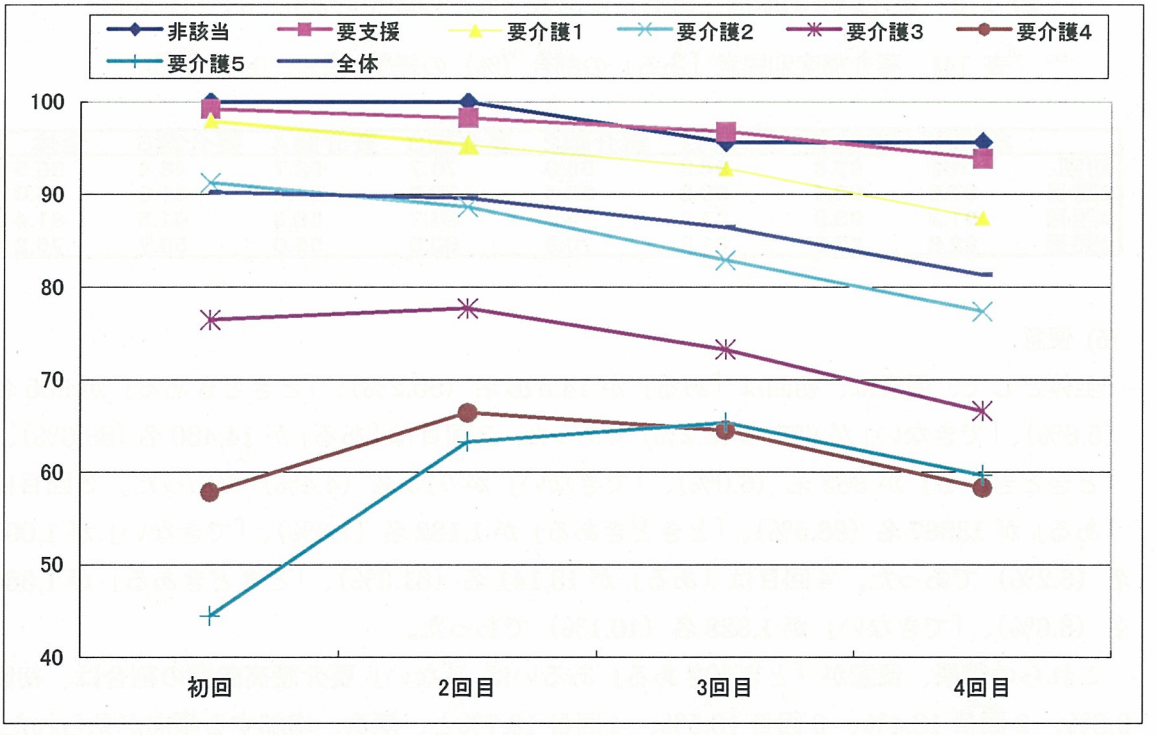

図 177　要介護度別便意「ある」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

表 142　要介護度別便意「ある」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	99.2	97.9	91.2	76.5	57.8	44.5	90.2
2回目	100	98.3	95.4	88.6	77.7	66.4	63.3	89.6
3回目	95.7	96.8	92.8	82.9	73.2	64.5	65.4	86.5
4回目	95.7	93.9	87.4	77.4	66.6	58.3	59.7	81.3

(7) 排尿後の後始末

全体として、排尿後の後始末は、初回は「自立」が 9,334 名（57.8%）、「間接的援助」が 4,707 名（29.1%）、「直接的援助」が 793 名（4.9%）、「全介助」が 1,322 名（8.2%）であった。２回目は「自立」が 9,232 名（57.1%）、「間接的援助」が 4,859 名（30.1%）、「直接的援助」が 847 名（5.2%）、「全介助」が 1,218 名（7.5%）であった。３回目は「自立」が 8,618 名（53.3%）、「間接的援助」が 4,838 名（29.9%）、「直接的援助」が 1,028 名（6.4%）、「全介助」が 1,672 名（10.3%）であった。４回目は「自立」が 7,774 名（48.1%）、「間接的援助」が 4,783 名（29.6%）、「直接的援助」が 1,139 名（7.1%）、「全介助」が 2,459 名（15.2%）であった。

このように、排尿後の後始末については、何らか援助が必要な要介護高齢者の割合は、初回 42.2%、２回目 42.9%、３回目 46.7%、４回目 50.9%と漸次、増加していた。

要介護度別には、要支援、要介護 1 においては、認定回数が増加するにしたがって自立割合が減少していたが、要介護 2 から 5 においては初回から２回目に、要介護 2 では 41.8%から 42.6%へ、要介護 3 では 13.7%から 26.3%へ、要介護 4 は 3.7%から 16.5%へと 4.5 倍へ、要介護 5 では 0.9%から 10.7%へと 11.9 倍となり、要介護度が高いほうの自立割合が顕著に増加していた。２回目から３回目には、要介護 3 から 5 までは、すべて自立割合が増加していた。３回目から４回目には、要介護 4 を除いて、減少していた。要介護 4 は、初回から４回目まで、認定回数が増加するにしたがって、漸次、自立割合が増加していた。

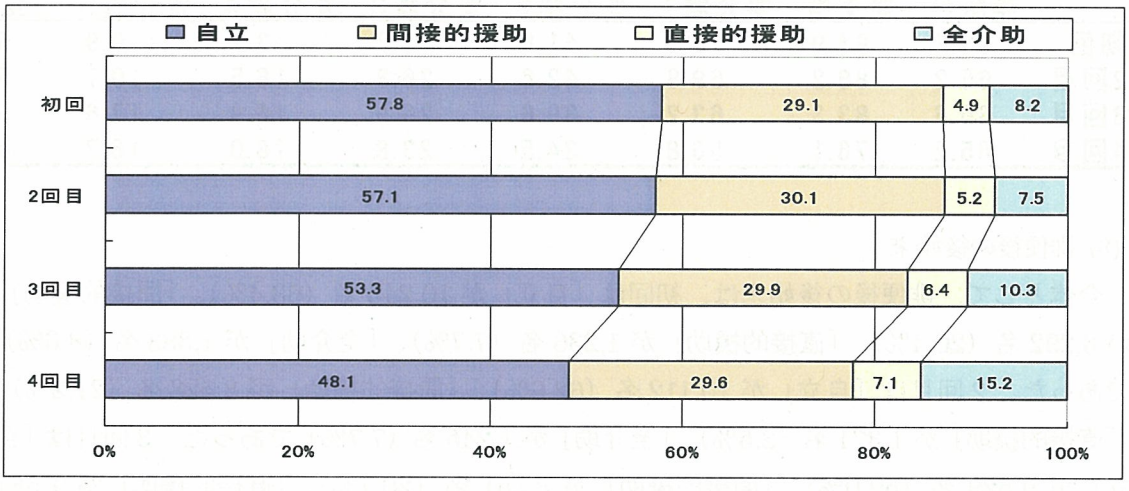

図 178　排尿後の後始末（N=16,156）